関東ふれあいの道　埼玉⑪　義経伝説と滝のあるみち

渡辺　真一

2019 年 11 月 16 日（土）快晴　小春日和

参加者：　高橋、鶴田、今井、鎌田、大西、木村、近藤、渡辺（敬称略、計 8 名）

コースと時間記録：　吾野駅 9：18～9：56 顔振峠入口 10：05～11：00 顔振峠 11：15～11：45（622m ピーク）～11：57 傘杉峠（昼食）12：45～13：02 第 1 のガレ 13：10～13：20 第 2 のガレ 13：35～13：55 黒山三滝 14：05～14：23 黒山バス停 14：24～（バス）14：45 越生（実総走行距離：10.0km）

関東ふれあいのみち埼玉④「峠の歴史をしのぶみち」を予定していたが、この日の芦ヶ久保駅から正丸峠までのタクシー予約が取れず、急遽⑪の「義経伝説と滝のあるみち」に変更となった。急な変更にも関わらす、時間前に全員が吾野駅に到着。予定時間よりも早く歩き出した。まずは、人家がポツポツとある車道を 2km ほど歩き、そこから顔振峠への登山道へ入っていく（写真 1）。

写真 1　顔振峠入口にて

【インターネットより】顔振峠（かあぶりとうげ）とは、平安時代、源義経が京落ちで奥州へ逃れる際、あまりの絶景に何度も振り返ったため、また、その際のお供の武蔵坊弁慶があまりの急坂に顔を振りながら登った等が名前の由来になったと説明されている。　また、別の説明板には「冠のようにとがった山があることから冠（かんむり）が濁って顔振（かあふり）になった…」とあるが、『武蔵野話』（1815）には「越生領黒山村に嶺（とうげ）あり。北方より向うは高麗郡長沢村なり。この嶺をカアブリ嶺といふ。按ずるにこの嶺は秩父山の入口にて嶺のはじまりなり、終の嶺を足が窪嶺といふその頭に有ゆゑ冠嶺（かぶりとうげ）といふ。方言にてカアブリと唱る故に本字を失うとおもはる」と記されている。現在では、顔振（こおぶり、またはこうぶり）峠として広く知られるようになるが、地元近辺では顔振（かあぶり）と呼ぶ人が多かった為、現在では行政でも顔振峠（かあぶりとうげ）の呼称で統一している。

写真 2　顔振峠から秩父方面の山々（右端：武甲山）

写真 3　顔振峠から富士山（右は御前山）

写真４　顔振峠から丹沢方面の山々（中央：大山）

写真５　顔振峠の茶屋前にて全員記念写真

写真６　昼食後傘杉峠にて

写真７　越生町産業観光課の看板

写真８　第１の崩落現場（岩盤まで土がえぐられている）

写真９　橋が流されたところを渡る

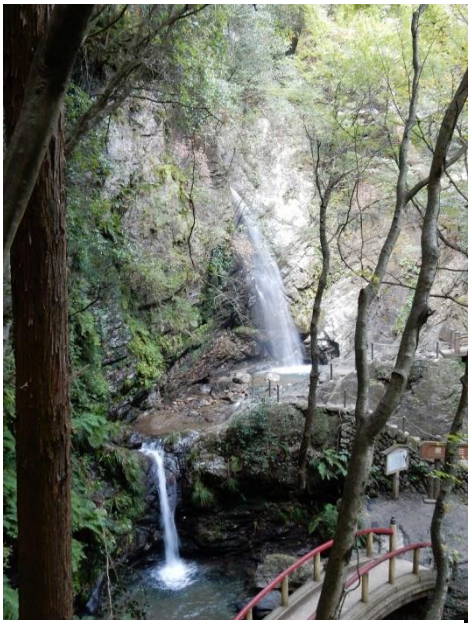


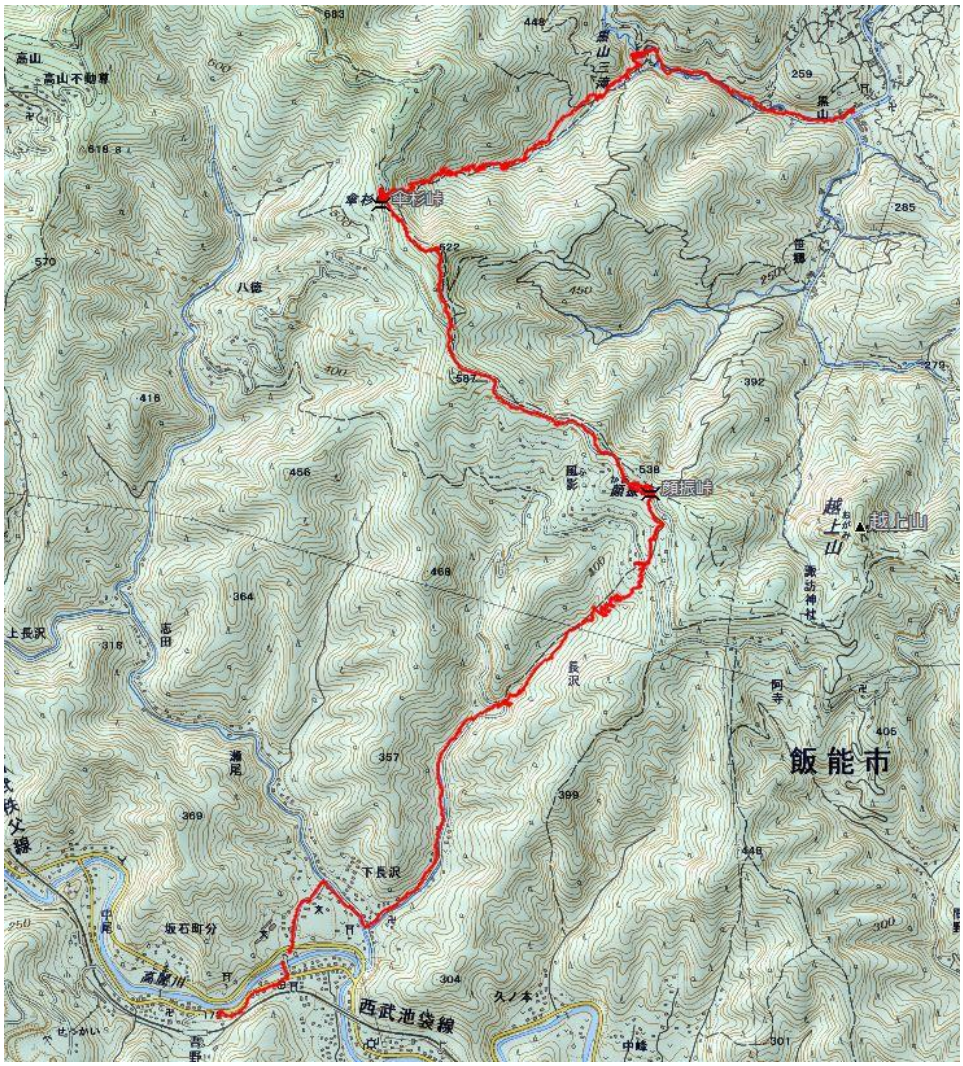
写真 10　男滝、女滝

顔振峠へは、あまり眺望のない林の中を結構な急登を強いられる道だった。義経が辿った道は西南方向から東北方面だろうからこの道が該当すると思われるが、昔は樹木が少なかったのだろうか。しかし、顔振峠への車道に出た途端、素晴らしい眺望に目を奪われた。真っ白な富士山を中心に左は丹沢の山々（左端：大山）、右は御前山から奥多摩から秩父の山々（右端：武甲山）まで一望できる（写真 2～4）。ひとしきり眺めを楽しんだ後、車道を傘杉峠方面に向かう。途中から車道を離れて山道へはいり 622mピーク（大峰山）を越えて再び車道上の傘杉峠に到着。昼食に適した日だまりを探して到達したのがここだった。車道脇のベンチで三々五々昼食を取る。昼食後記念写真を撮り（写真 6）黒山三滝への道に入ろうとすると「崩落箇所があるので入山しないように」との看板が越生町産業観光課の名前で立てられていた（写真 7）。

台風 19 号の大雨の影響だろう。本来はこの様な表示が出ている以上、入山は控えるべきであろうが、自己責任で対応するということでこのまま進むことにした。途中、大きな崩落が 2 箇所あった。最初は横からの沢が上部から崩れ落ちて、道を押し流してしまっていた（写真 8）。大西さんが用意していた 10m の細引きを使って沢へ下るルートの安全を確保する。2 回目の崩落は道そのものが消えてしまっており、高巻きしながらの藪漕ぎを強いられた。対岸に道を見つけ、沢を下って渡り本来のルートに戻ることができた。その後も橋が流されていたりした（写真 9）が、それほど問題なく、黒山三滝に着いた（写真 10、11、12）。ここはすっかり観光地であり、似合わない我々は記念写真を撮って早々に通過した。黒山バス停には間に合わないと思っていたバスがまだ来ておらず、1 時間のバス待ちをしないですんだ。そのバスでずいぶんローカルな越生駅に。やはりローカル色満載の八高線で東飯能に出て反省会をして解散した。

写真 11　黒山三滝（撮影ポイント）

写真 12　天狗滝



GPS 軌跡図と高度グラフ